

アメリカの女子大学教育

難 波 紋 吉

一 は し が き

私はロックフェラー財團から厚意ある資金の援助を受け、アメリカ合衆國、ヨーロッパ諸國及びその他の若干の國に於ける教育、特に女子大学教育の現狀を視察・研究する機会を與えられた。私はかかる機会を與えられたロックフェラー財團に対し、衷心より感謝するものである。同時に、私はこの旅行に対して感謝すべき三つの個人的理由をもつていた。

その第一は、私が数年前、八十年の歴史を誇る神戸女学院の院長兼學長に就任した關係上、これまで、私の専門外におかれていた女子高等教育について研究し、またその現狀を視察する必要を感じていたのである。同時に若し出来るならば、この視察・研究を通じて、男子大学教育に比して著しくおくられているように見える女子大学教育を、些かなりとも改善し、またこれを向上せしめたいものと念願していたからである。

第二に、アメリカは、後で述べるように、世界中のどの國に於けるよりも、民主主義教育の一層の普及と發展に對して努力しているのみならず、これに関する様々の実験をも試み、輝かしい幾多の業績をあげている國である。とりわけ、女子大学教育の推進と拡充のために、異常な熱意を示し、女子に對しても、男子に對すると同様の機会均等を與え、またその保証をしている國である。ここに、アメリカ文化の優れた特質の一つが見られる。同時にこれはアメリカの民主主義化を助長・發展する重要な鍵となつていとも考えられるのである。私はかかる事情を、今回の旅行を通じて、より親しく、また詳さに、視察・研究し、わが國の民主主義教育の發展に資したいと考えていたからである。

第三に、一國の發展や興隆が、基本的に、何に基因するであろうかは、常に私の心を飛來する關心事である。私はこの旅行を通じて、かかる基本的要因に少しでも触れることが出来ればと希つた。その要因のうちには、いうまでもなく、豊富な物質、広大な領土、経済力の強弱、政治組織の如何、軍事力の大小、科学知識の普及、及び宗教や教育のあり方等々多くのものが数えられる。そしてこれらのものが綜合されて、全体としての國力を形成しているのではあるが、しかし私はそのうちでも、特に何が最も基本的に重要な役割を演じているかを知りたいと思つてゐた。特に私は一國の興隆と教育との關係について異常な關心を持つていたのである。

このような關心や希望をいだいて、私は、一九五五年十月十二日、神戸女学院創立八十周年の記念式を終るとともに、旅行の準備にとりかかり、十月二十二日、多くの同僚や学生及び友人の温い見送りを受けて大阪駅を出発した。そして予定通り、二十四日、パン・アメリカン(PAA)機に乗つて羽田を出発した。ハワイ、カリフォルニア州及びアメリカの中央部にある若干の主要都市と、そこにある大学(別表)を視察した後、ニューヨークに到着、ここでクリスマスと新年を迎えた。一月早々、ニューヨーク・イングラッドにある若干の大学を訪問した後、一九五六年一月二十七日ニューヨークのアイドルワイルド飛行場からロンドンに飛んだ。ロンドン、パリ、ベルリン、ジュネーブ、ローマ及びこれらの都市にある主要な大学を視察した後、更にカラチ、ニュー・デリー及び香港に立寄り、ここでも少数の大学を訪問した。二月二十七日羽田に帰着し、二月二十九日、約四ヶ月にわたる欧米旅行を終えて、無事、京都へかえつたのである。その間、幸にして、常に豊かな恩寵と健康に恵まれ、旅行中僅かに三粒のアスピリンを服用するに止つたことは、誠に感謝にたえないところである。

私が訪問した教育機關名を挙げれば、次の通りである。

I 米國に於ける大学及びその他の学校

1. University of California, Berkeley, Calif.
2. Oakland Junior College, Oakland, Calif.
3. San Francisco College for Women, San Francisco, Calif.
4. San Francisco State College, San Francisco, Calif.

5. Mills College, Oakland, Calif.
6. Claremont University, Claremont, Calif.
7. Pomona College, Claremont, Calif.
8. Scripps College, Claremont, Calif.
9. Whittier College, Whittier, Calif.
10. Redland University, Redland, Calif.
11. University of California in Los Angeles, Calif.
12. Occidental College, Los Angeles, Calif.
13. University of Nebraska, Lincoln, Neb.
14. University of Chicago, Chicago, Ill.
15. University of Illinois, Chicago, Ill.
16. Rockford College, Rockford, Ill.
17. Beloit College, Beloit, Ill.
18. Columbia University, New York, N. Y.
19. Barnard College, New York, N. Y.
20. Julliard College, New York, N. Y.
21. Manhattanville College, Purchase, N. Y.
22. Connecticut College for Women, New London, Conn.
23. Sarah Lawrence College, Bronxville, N. Y.
24. Bryn Mawr College, Bryn Mawr, Penn.
25. Radcliffe College, Cambridge, Mass.
26. Harvard University, Cambridge, Mass.
27. Northfield High School for Girls, Northfield, Mass.

28. Smith College, Northampton, Mass.
 29. Mt. Holyoke College, South Hadley, Mass.
 30. Wellesley College, Wellesley, Mass.
 31. Yassar College, Poughkeepsie, N. Y.
- II
- 米國以外の國に於ける大學及びその他○學校
32. Oxford University, Oxford, England.
 33. St. Anne's College, Oxford, England,
 34. Cambridge University, Cambridge, England.
 35. New Hall, Cambridge, England.
 36. Newnham College, Cambridge, England.
 37. London University, London, England.
 38. Bedford College, London, England.
 39. Paris University, Paris, France.
 40. Center Pédagogique, and Lycée annex, Sevres, France.
 41. Foyer des Lycéennes, Paris, France.
 42. Freie Universität Berlin, Berlin, West Germany.
 43. University of Geneva, Geneva, Switzerland.
 44. University of Lausanne, Lausanne, Switzerland.
 45. University of Rome, Rome, Italy.
 46. St. Joseph College, Karachi, Pakistan.
 47. Delhi University, New Delhi, India.
 48. Lady Irwin College, New Delhi, India.
 49. Queen's College, Hong Kong,
 50. Hong Kong University, Hong Kong.

尙、この機会に、私は、先づ第一に今回の私の旅行を可能ならしめられたロックフェラー財團の会長ラスク博士及び私の旅行に対しあらゆる便宜を與えられたそのスタッフの方々の御厚意に対し深甚の謝意を表したい。また私をロックフェラー財團に推挙され、直接・間接常に私の旅行を出来るだけ効果的ならしめ、また快適ならしめるために、多大の厚意と助力を惜まれなかつたロックフェラー財團のセクレタリーであるミス・ラインド及び人文科学部長フラス博士に対し、深甚の謝意を表するものである。

次に校務多端の際にも拘らず、私の旅行を心よく承諾されたのみならず、私の不在中、女学院の運営の責任に當られた理事長神崎驥一先生と二宮中高部長及び理事、教授諸氏に対し、更にシカゴにある Kobe College Corporation の会長ドレーク博士とそのスタッフの歓待及び理事とその他の会員の芳情に対し、等しく感謝の念を禁じ得ない。また世界の各地に散在する同窓会の諸姉の手厚いもてなしに対しても、深く感謝するものである。

最後に、私が訪問した大学の総長、学長、教授及びその他の方々には私の視察・研究に対してあらゆる便宜を與えられたのみならず、様々の友情と歓待を惜まれなかつた。これによつて私の視察はきわめて効果的にして快適なものとなつたのであるが、これは私が永遠に忘れ得ない喜びであり、また感激である。これらの方々に對し、ここに、謹んで、深甚の謝意を表するものである。

二 アメリカの高等教育

それぞれの國民は、必ずその要求と目的に適合するような教育を施し、また教育制度を設け、これを維持存続しようとしている。何となれば、教育または教育制度はその國民の發展とその國民の全体としての文化（生活様式）の向上と極めて密接な關係を有しているからである。かつてマイケル・サドラーが、國民が個人に対してどのような教育を要望しているかは、國民が個人に問いかけるその質問によつて推察することが出来る、次のように述べたことがある。

ドイツ人は、彼に、「どんな事を知っているか」と問いかけるが、フランス人は、「どのような免許状または資格をもつているか」と問い、イギリス人は「どんな人間であるか」と問い、アメリカ人は「何が出来るか」と問う、と

いうのである。これらの質問は、ある意味に於て、端的に、それぞれの國民の國民性、従つてその國民の教育に対する目的や理想を暗黙のうちに表明しているように見える。それ故に自國以外の國の教育や教育制度の視察・研究に於て、これらのものをそれぞれの國民の文化と關係せしめて考察することは、極めて大切であり、また有意義である。私は今回のアメリカ、ヨーロッパ及びその他の若干の國に於ける高等教育の視察・研究に當り、上述の点に対して特に關心を持ち、注意を拂つて來たのである。しかし、今この点について、詳しく考察し、それぞれの國の教育の特質や差異等に関して詳細に述べる余裕がないことは遺憾である。そこで極めて大まかに教育の型相ともいうべきものについて略述するにとどめたい。

現代の欧米諸國の間に見られる教育制度は、大体に於て、これを二つの型または型相 (Patterns) に分けることが出來ると思う。その一は、ヨーロッパ的な型、あるいはヨーロッパ的型相であり、他はアメリカ的な型、あるいはアメリカ的型相である。ヨーロッパ的型相は、いうまでもなく、長い歴史と經驗を経て、強固な基盤の上に立つているが、アメリカ的型相は、本質的にはヨーロッパ的型相の模倣であるか、または修正であるに過ぎない。しかしアメリカ合衆國とその文化の特殊の形態は、ヨーロッパ的型相と明瞭に區別されるころの、独自のアメリカ的型相に發展した。即ちアメリカに於ては、普通教育と高等教育が急速な發展をとげたのみならず、また独自の型相を確立したのである。それ故に、一九五五年十二月五日発行のニュース・ウィークは「アメリカの学校体系は、世界中に於て、最も偉大にして、最も霸氣があり、しかも最も成功している教育形態である。この学校体系は、民主主義の礎石として、教育を價值づけた建國の祖先達の確信を、まさしくも、実証するものである」と述べている。これは教育に対するアメリカ人の確信を物語つているとともに、その独自性を表明しているものと思う。

これらの二つの教育型相は、ともに、一般的に、それぞれ個人の人格を尊重し、教育の対象を個人に求め、個人にその出発点をおいている点に於て、共通したものを持つている。しかしヨーロッパの教育は、歴史的には、その本流を遠くプラトウに見出している。いわば、ギリシャの貴族的奴隸文化の原動力となつていた教育、またはこれに適合するように工夫されていたところの教育である。従つて、第一次的には、上層階級のうちに指導者を養成し、下層階級のうちに善良にして従順な被指導者を育成することを目的としたものであることは明かである。これに反して、ア

アメリカの教育は、ヨーロッパの教育の傳統と經驗を多分に繼承したものであるが、アメリカ國家の自然的環境や民主的社會構造、及びそこに生れた文化の特質等の影響により、著しく異なるものとなつてゐる。事實、アメリカの教育は、ホーレス・マンの創造と努力に負うところが非常に多いといわれているが、彼が特に強調したところは、要するに、アメリカの民主化を目標とした教育であり、またかかる教育を主眼とする教育制度を確立することにあつたのである。そしてその後、アメリカの目的と理想によりよく沿うような教育制度の發展を見たが、その貢獻は、主としてジョン・デューイーに歸せられている。

ホーレス・マンは約一世紀前に、アメリカの全ての州が公立學校を建てて、そこで普遍的義務教育を、授業料を徴收することなく、また超宗教的に、実施する必要を強調した。彼は凡ての個人が等しく普通教育を受ける機会を與えられ、民主主義社會に於ける市民にとつて必要な教育がなされるべきであると考へた。このような普遍的義務教育は、アメリカの民主主義の發展に対して大いに貢獻したのみならず、その發展にとつて極めて重要であつた。かかる教育目的や理想を一層組織的・科学的なものにし、民主的・産業的社會の礎石を築いたのは、まさに、ジョン・デューイーであつた。このようにして現在のアメリカの教育制度が發展したのは、せいぜい百年を出ないのであるが、しかしその發展の速度は教育史上、他にその比を見ないところである。勿論、アメリカの教育や教育制度の根底に流れてゐるヨーロッパ的教育の精神や制度を無視することは出来ないが、しかし、これらのものがアメリカの社會と文化という新しい土壤によつて培われ著しい變化と急速な成長を遂げたことは否定されないのである。特に女子高等教育に對する旺盛な關心と、その發展に對する努力は、他の如何なる國にも、その比を見ない。現在、アメリカが二百六十六の女子大學を有している事實は、このことを明に物語つてゐるのである。これはアメリカに於ける独自の現象ともいふべきものであり、またアメリカの高等教育の他の特質でもある。

現在、米國には、學位を授與し得る單科大學 (Colleges) 綜合大學 (Universities) 教育大學 (Teacher's Colleges) 専門職業大學 (Professional Schools) 工科大學 (Technical Schools) が千三百一校ある。この數は世界中の國々にある大學を總計した數に匹敵するといわれている。そして十八才から二十一才の年令層にある男女六人中、その一人は、現に大學教育を受けてゐるのであり、學生總數は二百六十万以上に及んでゐるということである。既に大學を卒

業したものの数は六百万以上に達している。(Earnest Havemann and Patricia S. West, They Went to College, 1952)・これは世界の教育史上、かつて見られなかつた驚異的現象であり、アメリカの民主主義の勝利である。また如何なる時代、如何なる國家に於ても、大学の学位が、アメリカに於けるほど普及しているところはないし、また従つて学位が職業や経歴の要件としてこれほど要求されているところもないのである。しかもアメリカは、更に將來より多くの男女に対して、高等教育の機会を與えようと試みてゐるのである。

二百六十六校にのぼる女子大学は、世界中のどの國に於けるよりも多い数であるが、更に多くの共学大学があつて、これらは女子学生にその門戸を開いてるのである。この現象は、アメリカの婦人が、一般的に、教育に熱心であり、特に女子高等教育の機会均等が與えられるとともに、その社会的地位が向上するように努力して來たことに基くが、他方、これに対する世論の支持があつたことを見のがしてはならない。これは、アメリカ文化の他の文化と異なる重要な一側面を示しているとともに、アメリカの民主主義社會の健全な發展を促進する重要な要因と見なされる。ラスキイが、まさしくも述べているように、アメリカの傳統の中で、最も偉大なものは、教育に対する信頼とその確保のための情熱であり、これはその歴史の始めから今日に至るまで、その範圍と強度に変化があつたとはいへ、一貫してゐるところのものである。まことに、民主主義國家としてのアメリカの現在の繁榮と幸福と發展の原動力となつてゐるものは、單に広大な土地、豊富な資源、旺盛な活動力、民族としての若さ等の如きものみに歸せられるべきではなく、むしろ一般的に宗教を重んずるとともに教育を尊重し、早くから男女に対して教育の機会均等を認め、來たその事實に歸せられねばならないと思う。

三 女子大学の發展

アメリカに於ける最も古い大学はハーヴァード大学である。ハーヴァード大学は、一六二〇年ビルグリム・ファーズがプリマスに上陸した後、わずか十六年、即ち一六三六年に、ジョン・ハーヴァード牧師によつて創立された。その後、八つの大学が設立されたが、その何れも、ペンシルベニア大学以外は、宗教大学であり、その主たる目的は、「知識を有する牧師の育成」にあつた。

しかし当時の大学は、現在の大学と比較されるとき、その規模は極めて小さく、教授の数もまた学生の数も、僅少であつた。ハーバード大学の設立を見てから約二百年、即ち一六三〇年から一八三四年の間に、私立大学及び州立大学の数は、六十一校に増加した。それにも拘らず、いわゆる「女子に捧げられた大学」としての女子大学が生れたのは、当時既にその設立が問題にされ、そのための運動が展開されていたにもかかわらず、その後のことに属する。女子大学設立の運動を指導した者のうちには、エマ・ウィラード (E. Willard, 1787-1870)、ビーチャー (C. Beecher, 1800-1878) 及びメリー・ライオン (Mary Lyon, 1797-1847) 等の先覚者があつた。

しかし女子高等教育に対する一般の関心や支持は、この当時に於ては極めて低く、「教育ある婦人よりも家庭的に單純に育てられた娘の方が望ましい」という、世俗的な考え方が支配的であつた。従つてかなり多くの女子は小学校 (Common School) に入学したが、上級の学校に進むものは、上層階級の女子の一部分に限られており、彼等は、主として私立もしくは教会立の上級学校に入学して高等教育を受けた。いずれにせよ、女子に高等教育を興えることによつて、その「デリカシー」が破壊されるという考え方は、他の國に於けると同様、相当に強く人心を支配し、従つて高等教育は男子に與えられる特権であるかのように見なされていた。この考え方は、他方に於て、全体としてのアメリカが、まだ農業國としての段階を出でず、依然として保守的・封建的觀念によつて支配されたことと密接に關係していたように思われる。しかし北東部に於て漸時商工業や交通通信機關が發展し、また西進運動がますます活潑化するにつれて、政治的・經濟的・社会的諸条件の著しい変化もたらされ、これにつれて女子高等教育に対する觀念もまた当然に変化を來さざるを得なかつた。かくて、この状態は、ついに一八三六年、始めてジョージア女子大学の設立を導き、(後にウェスリアン大学となる)一八三七年、始めて女子に対して男女共学の門戸を開くようになったのである。この共学に先鞭をつけたのは、私立大学としてのオベリン大学、(Oberlin College) であり、最初四人の女子学生を正規の学生として入学せしめた。これはまことに劃期的な出來事であつた。ついで私立大学として、アンティオク大学 (Antioch College) が、一八五三年に女子に門戸を開き、州立大学としては、一八五〇年にユタ大学 (Utah College)、一八五六年にアイオワ大学 (Iowa College) 一八六六年にカンサス大学 (Kansas College)、同く一八六六年にミネソタ大学 (Minnesota College)、一八七〇年にミシガン大学、カリフォルニア大

学、イリノイ大学 (Michigan, California, Illinois Colleges) / 一八七一年にネブラスカ大学 (Nebraska College) / 一八七三年にオハイオ大学 (Ohio College) / 一八七四年にウイスマコンシン大学 (Wisconsin College) が共学を開始した。

然るに、女子大学は前述せる通り、一八三六年、ジョージア州メイコンにジョージア女子大学が誕生し、次いで、一八三七年、メリー・ライオンの熱烈な努力によつて、マサチューセッツ州のサウス・ハッドレイにマウント・ホリオーク女子神学校 (Mt. Holyoke Seminary) が生れ、更に一八三九年、イリノイス州ロックフォードにロックフォード女子神学校 (Rockford Female Seminary) が設立された。この二つの女子神学校は、後にそれぞれ、独立の女子大学となり、現在に及んでゐる。これは英國のオックスフォード大学にある五つの女子大学 (Lady Margaret Hall, 1878, Somerville College, 1879, St. Hugh's College, 1886, St. Hildas College, 1893, St. Anne's College, 1899) / ケンブリッジ大学にある四つの女子大学 (Griton College, 1869, Newnham College, 1871, Hughes Hall, 1885, New Hall, 1954) 及びロンドン大学にある四つの大学 (Bedford College, 1878, Westfield College, 1882, Royal Holloway College, 1883, Queen Mary College, 1887) とともにである。

その後、女子高等教育を促進する氣運が更に展開された。ニュー・ヨーク市に開かれた全國婦人大会に於て婦人参政権への要望が決議され、一八五二年には、マサチューセッツ州に於て義務教育法が制定され、これとともに公立・私立中学校が著しい發展を遂げた。また南北戦争中に多くの自覚せる婦人は、黒人解放運動に同情を寄せたが、同時に自らの社会的地位についても大いに反省するところがあり、これが主たる動機となつて、教育、職業、政治等の問題をめぐる婦人解放運動が展開されるようになった。これらの一連の事情が、女子高等教育の促進と女子大学の設立に拍車をかけたことは、いうまでもない。

かくて一八六一年には、ニュー・ヨーク州のボーキップシイにヴァッサ大学 (Vassar College) が創立され、次いで一八六八年には、オローラにウェルズ大学 (Wells College) / 一八七五年には、ウェルズレイ大学 (Wellesley College) 及びスミス大学 (Smith College) / 一八七九年には、ラドクリフ大学 (Radcliffe College) / 一八八五年には、ブリン・モリア大学 (Bryn Mawr College) とミルズ大学 (Mills College) が生れ、更に一八八八年にはガ

ウチャー大学 (Gaucher College) 一八八九年にはバーナード大学 (Barnard College) が創立された。また南部諸州に於ても若干の女子大学が創立された。このように十九世紀の後半に於て、女子大学教育は米英に於て顯著な發展を見たのである。

これらの女子大学は、ラスキーによれば、南北戦争後、新興階級がその息子をハーヴァード、エール、プリンストン大学等に入学せしめると同じ理由によつて、その娘を入学せしめるためにつくつたものである、といふのである。事実、男子の大学は女子の入学を絶対的に拒否したため、この教育上の欠陥を補う意味に於て、また女子は男子と同様に大学教育を受けるに足る能力を有することを示す意味に於て、女子大学の設立が促進されたと見ることが出来るのである。このような目的をもつて生れた女子大学の学科課程は、従つて、殆んど男子大学のそれを模倣したるものであり、また教養を中心としたものであつた。またこれらの女子大学に於ける学費は、概して州立の共学大学のそれに比して遙かに高かつたがため、結局に於て、女子大学に入学し得るものは事実上、良家の女子に限られ、従つていわゆる新興階級の教育機関であるかの如き觀を呈したといえるのである。しかしその後には女子大学の發展は、必ずしもそうとは限らず、現在では、多くのスカラシップや貸與制度及び勤勞制度が設けられているため、広く各州から來る各階層の女子や外國の學生にも勉學の機會を與えるようになってゐるのである。

四、女子大学の現状

現在アメリカで行われている教育は、大体に於て、男女共学が優勢である。そしてこの傾向は益々顯著になりつつある。小学校は、その九十六%までが共学制度を採用し、ハイスクールは一般的に、共学制をとつており、州立大学は、殆んどその凡てが共学制度である。特に中西部から西部にかけてこの制度は圧倒的であるが、南部に於てはまだ共学制度を採用していない大学もある。私立大学のうちには、共学のものもあり、また男女別のものもある。

多くの私立大学は、最初、男子のみの大学として発足し、絶対的に、女子の入学を認めなかつたが、最近になつてこれらの男子大学に於てさえも漸次共学またはこれに類似した制度を採る傾向にある。特に大学院は、私の知る限りでは、プリンストン大学を除くの外は、凡ての大学が共学制度を採用してゐる。更に從來女子大学としての矜持を誇

つて来たもののうちに於てさえも、男子にその門戸を開くものが現れて来た。少くとも、男子大学と女子大学との間に於ける学科の交流を許すもの数は、益々増加する傾向にある。従つていわゆる女子大学として、創立当初の状態のまま、今日まで存続しているもの数は、キャソリック大学を除けば、極めて少くなつていようである。今回私が視察した女子大学を共学制度と関係せしめて分類して見るとき、大体次のようになると思う。

(1) 創立当初から現在に至るまで女子大学として存続しているもの。

この範疇に属するものとしては、マウント・ホリオーク、ウエルズレイ、パッサー、セラ・ローレンス、ミルス、コネティカット・カレッジ、シモンズ等がある。

(2) 男子大学または共学大学と学科の交流を行つているもの。(カッコ内は男子及び共学大学名)

これに属するものとしては、バーナード(コロンビア大学)、プリン・モア(ハーヴァード、スワスマア、ペンシルベニア大学)、スマス(アモスト大学)、スクリップス(ボモナ大学)等がある。

(3) 大学院に於てのみ男子学生の入学を許可しているもの。ミルス、プリン・モア等がある。

(4) コーオディネイト大学として存続しているもの。

この範疇に属するものには、三種類の大学がある。

一、教授組織を有しないもの。

ラドクリッフは、おそらく、この種の大学の唯一の存在である。ラドクリッフは一八七九年に創立されたが、その教授組織は殆んど全くハーヴァード大学のそれと同一であり、ハーヴァードに於ける講義と同一の講義が、そのままラドクリッフに於ても反復されていたのである。従つて、ラドクリッフはハーヴァードの附属大学(Harvard Annex)といわれた。然るに一九四三年に至り、ラドクリッフ大学に登録した女子学生もハーヴァード大学の学生と同一の教室に於て、同一の講義を聴き、またそこで受験する制度が開かれ、ハーヴァードとラドクリッフは、法人としては、それぞれ独立した二つの大学でありながら、実質的には、共学大学になつたのである。しかし、ラドクリッフは、独立した学校法人であるから校舎、図書館、寄宿舎等は勿論のこと、総長や学長等を有し、女子学生は、アンダーグラデュエイトから大学院学生に至るまで凡てこの大学に登

録し、またこの大学の卒業生となるのである。

二、教授組織を有するもの。

然るにバーナードとコロンビア大学とは、コーオーディネートしている二つの大学であるが、ラドクリップの場合と異り、バーナードはそれ自体の教授組織を有し、大部分の講義がコロンビア大学とは別個に行われている。しかしバーナードの学生は、必要に応じて、コロンビア大学に於て講義を聴き、受験してその単位をとることが出来る。

三、男子大学を併設しているもの。

最近、ロックフォード大学は、従來のロックフォード（女子）大学（Rockford College）に加うるに、ロックフォード男子大学（Rockford Men's College）を、同一の校庭内に併設した。しかし、これら兩者の経営主体、教授組織、校舎、図書館及びその他の設備は殆んど全く同一である。いわば、名目上は二つの独立した大学になつてゐるが、實質的には一つの大学であり、共学大学である。このような大学はこの外にも若干あるようである。

これらの少数の大学について見てもわかるように、純然たる女子大学は漸次その影をひそめ、これに代つて学科の交流を行う大学またはコーオーディネートした大学が現れ、實質的には女子大学の数は減少する傾向にあるようである。アメリカに於て、近來、何故にこのような傾向が現れつつあるかについては、様々の理由が挙げられるであろうが、大體次のような三つの理由がその重要なものではないかと考へる。

(1) 民主主義の普及・徹底

アメリカの社会一般に於ける民主主義化の傾向が強化されるにつれて、当然に、男女間の差別撤廃、社会的地位の平等、特に教育の機会均等が強調される様になる。即ち男女の性別によつて大学教育を差別すべきではないという主張が起り、従つて國民の租税によつて経営されている殆んど凡ての州立大学は、原則として、共学制度を採用し、入学資格を得た凡ての男女に等しくその門戸を開いているのである。従來、男子大学であり、また女子大学であることを誇つていた私立大学のうちにもこのような傾向に順應するものが現れている。

(2) 人間性の発現

男女がともに生活し、ともに働き、ともに楽しもうとするのは、人情の常であり、人間の自然的要求である。むしろ人間の本能的性向であるかも知れない。更に民主主義社会に於ては、原則的に男女は結婚の相手を自らの意志に従つて自由に選択する権利が與えられているのであるから、男女が常に相互にその機会を求めていることも、また当然である。このような社会制度の下に於て、多くの男女がともに勉学する共学大学が、男女の交際、従つて結婚に對して、最も恵まれた機会と場所を提供するものであることは自明である。事実、アメリカの共学大学は、研究や教育の場であるとともに、若い学生にとつては、この上ない「結婚市場」(marriage market)でもある。この認識は、現在では既に常識となつてゐる。あらゆる人種、階層、宗教に属する多くの若い男女が四年間、あるいはそれ以上の年月を、机をならべてともに勉学し、ともに語り、またともに遊ぶ校庭は、最大にして最善の結婚市場といつてもよいのである。従つて大学教育を志望する男女は、特別の個人的理由がない限り、たとえば、特定の有名な私立大学のプレステージをあこがれるとか、或はその両親や兄弟姉妹が、特定の大学の出身者であつて、この大学に行くことを特にすすめるというような事情等がない限り、大多数の青年男女は、学費が比較的安くて、入学が容易である州立の共学大学を選ぶ傾向にあるようである。

(3) 経営上の困難

古い歴史と傳統、優れた社会的評價及び確立された財政的基礎を有する少数の女子大学以外のものの経営は、一般的に、州立大学の急速な成長、共学制度の進展、財政的基礎の薄弱に伴う教授組織の手薄等のために、かなり困難となりつつあるようである。かかる困難を除去する一つの方法として、共学制度を採用するか、またはこれに類似する他の方法を講ずるようになるのはやむを得ないところである。しかしこのような方法のみによつて、果して女子大学が、現在直面している困難を根本的に除去し得るかどうかは疑問である。更に、女子大学のみでは、教授組織や財政上の理由で設けたくても設けられない学科があると同時に、女子大学に於て特に優れている学科もある。たとえば、美学、音楽、ダンス或は家政に関する学科の如きものがこれである。これらの学科の交流は、男子大学及び女子大学の両者にとつて極めて望ましいことであるから、この傾向は、更に共学を促進することになるであらう。

次に女子大学をその教育方針の観点から区別して見ると、大体次のような四種類のものになる。

(1) 一般教養を重視する大学

ミルス大学の学長であるリン・ホワイト Jr. によれば、女子大学は、現代社会の男性支配に対する女子の反抗として生れたものである、ということである。即ち女子大学は最初女子の入学を拒否した男子大学に対抗する意味に於て創立されたのである。従つてその学科目は、当初に於て、男子大学のそれと殆んど選ぶところがなく、これによつて女子も男子と同様にかかる学科を学修する能力を有することを実証するにあつたといわれている。いづれにせよ、多くの女子大学は多くの男子大学にない、教養科目を中心とする学科課程をつくり、これによつて民主主義社会に於ける生活のありかた、いわば、善良にして指導性のある市民としての婦人の育成をその主たる教育目的としていたのである。従つてこの教育方針は、アメリカの女子大学の正統派的傾向を代表するものといつてもよいのである。この種の大学に於いては、どのような知識を修得すべきであるか、または修得しはじめべきであるかが、学科課程によつて、あらかじめ示されている。即ち大学が知的、道徳的、審美的、人格的要求ないし價値を予定し、これらの共通した目標に、凡ての学生が、能う限り、等しく到達するように、指導するのがこの種の大学の方針である。

ミルス、スクリップス、バーナード、プリン・モア、ウェルズレイ、スミス、マウント・ホリオーク、パッサー、セラ・ローレンス、ロックフォード、コネティカット、カレッジ、マンハッタングヴィル等は、この範疇に所属している。

(2) 個人教育に重点を置く大学

然るにこれに反し、女子の一般教養に重点を置くというよりも、むしろそれぞれの学生の個性や能力或は要求、いわば学生の個性 (individuality) を出来るだけ考慮して、個人中心の大学教育を試みようとする女子大学がある。これは大学教育に於ける一の新しい試みである。勿論、この種の大学といえども、一般教養の重要性や必要性を決して無視するものではないが、原則として劃一的教育に反対し、それぞれの学生の個人的差異や個人的生活経験、その知的發達の度合、個人の特質や能力、その生活目標等を考慮に入れ、これらのものを素材として学

習や教育の計画をたて、専ら個人の成長を期待する教育の重要性を強調するものである。

かかる方針の下にある大学においては、何等の必須科目というものは設けられない。試験もなければ、採点制度もないのである。教授はそれぞれの学生に関する個別的知識を土台として、彼に最も適當すると考えられる学習計画を学生と協議しながら立てるのである。蓋しこの種の大学は、共同の目標も個人の目標も、それぞれの学生に対してそれぞれ異なる方法を用いることによつてのみ、最もよく達成されるという信念の上に立つてゐるからである。また大学は、單に知識の修得のみを目的とすべきではなく、更にその知識の活用をも目的とすべきである。教えるということは、ただに觀念や知識の傳達のみに終つてはならない、その活用も同時に重視するものでなければならぬ、と考へてゐる。

このような教育方針の実施は、当然に、一つの学級に於ける学生数を出来るだけ少くし、教授と学生、学生と学生との間に於ける討議の機会を頻繁・緊密にし、知識・思想・經驗の交換を容易にすることを絶対的要件とする。

セラ・ローレンス大学は、このような大学の一つであるが、ここでは学生総数三百五十四人（一九五四—一九五五年）に対し教授は五十五名である。一学級の学生数は十人から十二人に限定され、主として討論の方法を用い、凡ての学生が發言の機会を與えられる。更に教授と学生とは定期的にまた必要に應じて学問上の問題のみならず、その他の問題についても親しく懇談する機会を有してゐる。

更に教育は学生の知的向上を目指すとともに、個人としての学生の人間としての成長を助長するものでもなければならぬ。教育は学生に責任ある社会人として、どのように生活すべきかを理解せしめるものでなければならぬ。このために、学生が集團生活及び個人生活を個別的・社会的に責任ある方法に於て処理することを、学ぶ機会を與へることは、これまた絶対的に必要である。

従つてこのような方針を有する大学は学問的並に個人的目的を達成するために、それぞれの学生に最も適當した指導を與へ、その成長を助長するところの何等かの組織を持たねばならない。この組織は、セラ・ローレンスに於ては、ドン(Don, アドヴァイザー)の組織である。これは、オックスフォード大学のドンの組織をまねたもの

のようであるが、その機能は教授がそれぞれの学生の研究や日常の問題の一切について、在学中常にその最もよき相談相手になるということである。ドンは大学に対しても、それぞれの学生にとつても極めて重要な関係を持ち、この種の大学の成否は、ドンの性質と役割にかかつている。いわばかかる教育の鍵は、この組織に秘められているのである。

これを要するに、このような大学はセラ・ローレンス大学の場合のように、既に数十年の経験を経ているものもあるが、まだ十分に確立されているものではなく、実験時代を出ていないようである。しかし学生の個性と能力をあくまでも尊重し、またこれを能う限り成長せしめる立場に於て、個別的に学生とともに学科課程を組み、教授と学生との個人的接触や関係を通じて教育的効果を挙げ、また一つの組を出來るだけ小さくして、討議や協議の機会を多くし、ドンの組織を設けて学生の生活的全般にわたつて指導を行い、学生の自発的・創意的研究を奨励し、試験制度や採点制度による成績の表示を避ける方法等をとることは、一應教育の理想的なあり方として、承認されてよいであらう。

しかし、かかる大学教育方針を効果的に貫くためには、少くとも次の四つの条件が絶対的に必要であるように見える。

先づ第一に、学生数が少数に限定されねばならないこと、第二に、各教授は教授であると同時にドンとなるため、彼は学問的にも人間的にも優秀でなければならぬこと、第三に、凡ての学生が寄宿舎生活をなし得るような設備を有し、信頼と協力と自由が許されることの学校共同体を前提とせねばならないこと、第四に、いわゆる理想教育であるがため、当然に、これを遂行するに足る豊富な基金を有せねばならないということである。

若しこの基金を有せないならば高い学費の徴収を余儀なくされ、従つてこれを支拂う能力ある少数者のための貴族的教育に墮するおそれがあるからである。尚、ペンングトン大学はセラ・ローレンスと同一の方針を有する他の有名な大学である。

(3) 大学院を重視する大学

マスター・コースを有している女子大学はかなり多いが、博士コースをもっている大学は、私の知る限りでは、

僅かに二大学のみである。即ちラドクリッフとプリン・モリアがこれである。しかしラドクリッフの教授組織は、前に述べたように、凡てハーヴァード大学の教授組織と同一であるから、形式的にはラドクリッフ大学の学位であるとしても、実質的には、ハーヴァード大学の学位である。従つてこの大学の博士コースは、学問的に最高の水準にあるものと見ねばならぬ。

これに反して、プリン・モリアは、それ自体のマスター・コース及び博士コースの大学院を有している。この種の大学院はプリン・モリアのみに見られる。この意味に於てプリン・モリアは、アメリカの女子大学のうち、全体として、最も高い学問的水準を持つもののものである。また大学院の学生の数も他の学生に比してかなり多し。その他の大学に於ける大学院の学生は、必ずしも、多くはない。何となれば、大学を出て、更に大学院に進むことを希望する篤学の女子学生は、主として男子大学または共学大学のそれを選ぶからである。従つて女子大学に於ける大学院の發達は、現在のところ、小数のものの外は、充分ではなく、多くの女子大学は、依然として一般教養大学として、その特質を發揮するように努力しているのである。

(4) 職業教育に重点を置く大学

女子大学は、先きに述べた通り、主として一般教養を中心とする大学として發達し、また現在に及んでいるが、ここでは深遠な学問の研究や職業のための高等教育は、どちらかといへば、敬遠される傾向にある。しかしアメリカには大学院を持つ大学があるとともに、職業教育に重点を置く女子大学もあるが、その数は少いようである。その最も有名なものはボストンにあるシモンズ大学 (Simmons College) である。この外に Pratt Institute や Russel Sage 大学等があり、多くの女子学生が在学してゐるが、いづれも共学である。シモンズ大学は一八九九年に創立され、一九〇二年に開校された。この大学の目的は一般教養科目に加うるに専門職業科目をもつてし、高い教養を有す職業婦人を育成するにある。この種の大学の最初のものであり、最も有名であるが、ここでは、アンダーグラデュエートの第一年目に於て一般教養科目を課し、第二年から九つの技術的・職業的学校にそれぞれ所屬し、それぞれの職業的学科課程を収めることになつてゐる。四年のアンダーグラデュエートを卒業した後、更に大学院に入り、より進んだ教育を受けることが出来る。九つの学校とは、印刷、図書館、社会科学、社

会事業、ビジネス（実業一般）、小賣、自然科学、家政、看護の学校である。この大学の卒業生の就職は非常に良好で、最近数年間に於ては、申込に対して應じきれず、いわば百%以上であつたといふことである。

私が觀察した範圍内に於けるアメリカの女子大学を、以上のように分類して見たが、この外に異つた歴史や異つた方針をもつ多くの大学があるのであるから、このように分類することには、おそらく多くの無理があるであろう。たとえば、キユウカ大学のように、在学中、凡ての学生に、毎年一定の期間、一定の職業につくことを強要している女子大学もある。その目的とするところは、学生が卒業後に於て、正当な地位を見出したり、または自らの經驗を生かすことが出来るように、学生を援助するにある。いわばこの大学では一般教養と職業教育とをともに追及しているのである。またキャンリック女子大学のように、特定の宗教的教理に基いて一般教養に重点を置く教育を行つていゝるものもあり、その数は他の女子大学に比して非常に多い。

しかし、大体に於て、アメリカの女子大学は、概して一般教養に主眼を置く大学であつて、その他の大学は、むしろ、特殊的存在であると見るべきであらう。

わが國に於ける大学は、四年制大学が二百二十七校（國立七十二、公立三十四、私立百二十）であり、そのうち男子大学は十四（國立五、公立五、私立四）、女子大学は三十四で、その他は共学大学である。この三十四の女子大学中、國立はわづかにお茶の水女子大学と奈良女子大学の二校のみであり、公立は大阪、高知、福岡、熊本の四校、その他の二十八校は、凡て私立大学である。（文部省調査局統計課、学校基本調査報告書、昭和二十九年度）私立女子大学のうち、最も古い歴史を有し、またその名声をうたわれているものは、基督教主義の大学または基督教主義に準ずる大学である。たとえば、日本女子大学、津田塾大学、東京女子大学、聖心女子大学、同志社女子大学、神戸女学院大学、金城女子大学、広島女学院大学等がこれである。この事實は、わが國の政府や公共團體が過去・現在に於て、如何に女子大学教育に対して無関心であり、また婦人を輕視しているかを示すものであり、他面に於て、アメリカの宣教師及び基督教團體の關係者が如何にわが國の女子高等教育、特に女子大学教育に熱意を示し、またこのために努力しているかを物語るものである。わが國に於ける基督教の過去百年間の様々な貢獻のうち、女子高等教育の助長と發展に対する貢獻は、最も顯著なものの一つであるといわねばならない。

尙、二年制大学即ち短期大学の数は昭和二十八年に於て二百五十一校（国立十七、公立四十一、私立百九十三）であるが、そのうち百二十一校（国立十、公立十三、私立九十八）は女子短大である。

四年制女子大学の学生数は毎年増加の傾向を辿つてゐるが、しかしその数は男子四十九万一千九百五十六に對し、約六万であり、その比率は、約十二％に當る。（文部省統計速報、昭和三十年八月）しかるに短大に於ては、百人中約五十四人が女子学生であり、四年制大学に於けるよりも、遙かに高い比率を示している。四年制大学と短大に於ける女子大学生総数の男子大学生に對する比率は約一割八分である。

大学院の学生は約九六〇〇であるが、このうち女子学生は僅に六〇〇を記録しているに過ぎない。以上の女子大学生に關する数字や比率は、わが國の女子大学教育がアメリカのそれに比して遙かに劣つてゐることを示している。

（文部省統計速報、昭和三十年八月）

更に女子学生が主として選択する四年制大学の学部は、學藝、文學、教育、家政、藥學、音學、理學の順であり、男子のそれが、經濟、工學、法學、商學、文學、學藝、教育であるのとかなり異つてゐる。これは女子大学に於ける學科課程の傾向をも示すものであるが、要するに一般教養が重視されていることは、アメリカの女子大学とほぼ同様である。

これを要するに、わが國に於ては、女子大学は、その數に於ても、また学生數に於ても男子大学よりも遙かに劣つてゐるから、將來女子大学教育を一層進展させねばならない。大学は原則として共學制度を採用してゐるが、現在のところ、女子が共學の一流大学に入学するためにはかなり困難な競争試験を受けねばならないから、女子大学にない學科、たとえば、醫學、藥學、法學等、または特に女子に適する學科、たとえば英文、國文の如き學科を有する大学を志望する者以外の多くの者は女子大学を志望する傾向にある。また父兄が共學大学よりもむしろ女子大学への入学を勧めるがために、女子大学を選ぶものもある。従つて、近き將來に於て女子大学が共學大学によつて代置されるといふような危懼は今のところ見られないが、共學の發展が、やがてアメリカの大学に於けると同様、若い女子にとつてより魅力的なものになり、大学にとつてその維持がより困難になるであろうことは、想像に難くないのである。

五 女子大学の印象

教育の地位、組織、その方針及び経営等は、その國の生活様式としての文化、即ち言語、文学、歴史、傳統、慣習、規範、哲学及び價值等々と密接な關係を有している。従つて一つの國の文化の特質について知り、或はこれを正しく認識することは、その教育を正當に理解したり、またこれを正しく評價するために、極めて重要であるといわねばならない。

しかし複雑多岐にわたるアメリカ文化を、全面的に正しく理解することは、事実、極めて困難であるが、教育の若干の特質について考察することは、必ずしも出来ないことではない。

(1) 一般的に、アメリカは何事につけ、若さを高く評價する國であるといわれている。若さはアメリカの生命でありまた重要な價值である。このアメリカの特質は、大学や大学生の生活の上にも反映している。概して、アメリカの大学生がその男女の如何を問わず、歐洲や日本の大学生にくらべて、著しくは、つらつとしており、元氣で満ちているように見えるのはこのためであろう。過去に執着せず、常に未來に大いなる希望を抱き、何ものにもとられずして、自由に行動し、自己の主張や意見を發表することに何等の躊躇も感じないように見えるアメリカの学生は幸福である。若さを貴ぶアメリカ文化は、常に若さを包蔵する子供や青年男女を讚美する傾向をもつてゐる。この傾向は、当然に、彼等に対する尊重を帰結する。アメリカが世界の歴史上、かつてその前例を見ない程、大規模に一般教育及び高等教育の普及を計画し、これを「すべての青年男女のために」遂行している姿は、誠に偉觀というの外はない。アメリカは教育の價值を確信し、その実現のために多大の努力と経費を惜しまない。教育は、青年男女の才能を解放して、アメリカ社会に奇蹟をもたらすその原動力であると考えられている。更に、教育はアメリカ文化のうちに依然として秘められている形式的な權威主義に挑戦し、民主主義社会を完成に導く重要な手段であるとも信ぜられているのである。いわば教育は民主主義社会の礎石であり、かかる教育に對するアメリカ人の信頼は絶對的である。

従つて大西洋岸から太平洋岸に拡がる北米合衆國の各州に無数の美しい公共建造物があるが、そのうち最も立

派なもの、学校の建物である。特に大学の建物は優れているように見える。学校の建物は青年男女の集る神聖な場所であり、これをめぐつてアメリカの美しい風景が常にえがき出されている。同時にこれはアメリカの教育が持つ高い比重を象徴している。たんに建物だけではなく、その設備もまた行届いており、且つ立派である。多くの大学のキャンパスの美しいことはおそらく世界一であろう。いづれにせよ、教育の力とその創造力を確信し、教育を能う限り広く普及・徹底することに多大の努力を拂つてゐる國は、まさにアメリカである。何となれば、アメリカ人の信条は民主主義であり、民主主義は青年男女の教育にかかつており、従つてアメリカの発展も福祉の増進もまた教育に負うところが多いと考えられているからである。

またアメリカは青年男女を尊重し、その未來に希望をかけるとともに、その関心や要求或は能力に即應する教育の実現を理想とするから、大学生生活の快適と幸福とは、大学の強い関心事とならざるを得ない。多くの大学に於ては規則づくめの窮屈さや嚴罰制度は排斥され、個人の自覚と責任にまつ自主・自律的行動が奨励され、大学やその寄宿舎に於て教育や日常行動に関する名誉尊重制度 (honor systems) 及び自治組織が発達しているのは、当然のことであろう。かくて自發的勉学の奨励、学内秩序の維持、学生の処罰事項、たとえば学則の違反やカンニング等の如き問題から寄宿舎や学外に於ける行動や風紀上の問題に至るまで、凡て学生の自治的統制と解決に委ねる傾向にある。しかし大学が、全然干渉しないというのではなく、かかる傾向を奨励する方針をとつてるのである。これは單に男子大学や共学大学に於て見られるのみならず、女子大学に於ても同様に見られる著しい現象である。このように広汎にわたる学生の自治的活動は日本の大学に於てはまだ許されていない。ともすれば学生の自治的活動に無秩序や政治活動が混入しがちであるわが國の大学に於ては、自治的統制はやむなく制限されることが多いのである。

学生の人格と自由を尊重し、その生活の快適を常に念願するが故に、教育の他の一面としての課外活動、たとえば趣味、スポーツ、音楽、演劇、應援團等の活動も著しく盛である。しかも、かかる機会を凡ての学生に及ぼそうと工夫しているところに、アメリカの大学の他の特質がある。日本に於ても課外活動は極めて盛であるが、残念乍ら、多くの大学に於て、主として設備の関係上、殆んど少数の学生、即ち選手に限られ、大多数の学生は

殆んどその機会を興えられない有様である。この意味に於ても、アメリカの学生は世界中のどの学生よりも幸福であり、どの國の大学に於けるよりも、アメリカに於て笑い声が高いといわれる所以である。

(2) 青年男女を尊重し、その價値を確信する教育や理想に加うるに、アメリカの大学には他の特質が見られる。それはアメリカの大学が、概して、因襲や傳統にとらわれず、儀式ばらず、極めて自由にまた能率的に經營されていることである。いわばインフォーマルな關係に於て教育や學問の研究が進められているということである。このことは、アメリカの大学に學則や規定がないとか、また學則や規定を必要としないとか、或はこれらのものが充分に守られていないとかというようになことを意味しない。むしろその反対である。しかしそれにも拘らず、教授と學生相互の關係、職員と學生との關係が、著しくインフォーマルであり、また親和的であることは、われわれ外國人の目をそばだたせる程印象的なものである。たとえば、學生は助手や講師に對しては勿論のこと、教授に對してさえも、その呼びかけは「何々教授」とか「何々先生」というようなかた苦しいものではなく、「ハロルド」とか「デイック」というような呼名によつてである。これは一面に於て慣習的なところもあるが、他面、社會的距離の近接を意味する親しみの表現であると思う。教授も學生の姓に「さん」づけをして呼ぶことは殆んど稀である。これを用いるのは何か不謹慎なことをして叱られるような場合のみに限られる。或る大学では學生がシガレットを口にしながら講義を聽いているし、また教授も喫煙しながら講義を続ける風景さえも見られる。女子大学に於ては、ショートパンツは季節に拘りなく、普通の服装であり、またかかる服装で教授と面接することも平氣である。大学によつては學生は上着を着たり、ネクタイをつけたりしなくてもよいのである。制服のある日本の大学とその光景を異にしている。しかしそれぞれの大学に於て喫煙や飲酒に関する取扱方は異つてゐるから、これは一般的にはいえない。女子大学は校内に於ける喫煙を許しているが、多くの場合、場所を指定し、校内に於ける飲酒は原則的に禁じてゐる。男子大学や共学大学に於ても、このような取扱をしているものもある。また學生が教授との議論に於て相当強く自説を固守して教授の説に屈服しない風景も屢々見うけられる。いづれにせよ、一般的に、インフォーマルな關係、従つて友愛の精神が、教室やセミナーに満ちているように感じられる。このことはヨーロッパや日本の大学に於けるそれと對照的である。たとえば、ヨーロッパや日本の大学で、

鄰近その事情は漸次変化しつつあるとはいへ、教授はその講義に於てある程度の威厳を保とうとするし、教授は学生の質問を喜ばないことがあるし、学生もまた教授に対して遠慮しながら質問するが如きは、その一例である。わが國では学生が講義中に、喫煙することは原則として許されず、若し喫煙する学生があるならば、叱号して、この学生を教室外へ追出す教授さえある。女子大学に於ける学生は、学内での喫煙を禁ぜられ、禁を犯してまで学内で喫煙する学生は殆んど稀である。教室外に於てさえも、喫煙しながら質問することは、屢々教授に対する侮辱を意味すると感ずる教授もある。

(3)次に勉学についてであるが、一般的に、アメリカの大学生は、男女ともに、わが國の学生よりも遙かに多くの時間を毎日その勉学のために費しているように見える。或は毎日勉学せねばならない程社会的刺戟が強いが、または大学の教育方法がより多くの時間に費すことを余儀なくせしめているのかも知れない。おそらくこの両者に基くものと考えられる。アメリカに於ては、学生の在学中に於ける努力、従つてその成績は、多くの場合、何等かの形態でこれに正比例して報いられることが多い。ここに努力への希望があり、優秀な成績への約束がある。たとえば就職に於ける優位、或は上級学校へ進むための有利な条件、在学中に於ける奨学金や研究費の給與等、多くのものが約束されている。また優秀な成績は、本人のプレステイジとしても、高く評價される。更に大学の教育方法が、わが國の大学に於けるように、主として講義を中心として行われ、学年末に一回その内容について試験が行われ、これを受けることによつてその成績が決定されると異り、アメリカの大学では講義の内容のみでなく、また多くのアッサインメントが與えられ、これらのものについて試験が行われ、更に平常試験や論文等の成績も加算されて、全体としての成績が決定されるのであるから、平素から充分に勉強しているのでなければ、決して優秀な成績を望むことは出来ない。單に学年末または学期末に於ける試験のためのみ努力を集中することによつてよい成績をあげるといふ偶然性は少いのである。天才でない限り、平素から忠実に勉強し、ある程度の実力を有していなければ、よい成績をとることは絶体的に困難である。従つて、一般的にアメリカの学生は、男女を通じて、一方に於てよく遊ぶとともに、他方に於てよく勉強し、よい成績を挙げることに多大の関心をいだいているのである。ここでは、よい意味に於ける成功主義の原理が貫かれているように見える。この点に

於て、勉強しても、將來の就職や成功が必ずしも約束されるとは限らないわが國の学生の態度と著しく異なるものが見られる。

(4) 寄宿舎生活

大学の寄宿舎の設備と、寄宿舎生活による教育と生活経験とは、アメリカの大学の最も印象的な現象の一つである。この現象は有名な私立大学に於て特に顯著である。ハーヴァード、エール、プリンストン、アモスト、ウイリアムス等の男子大学がその壯麗な寄宿舎の建物とそこに於ける教育を誇つてゐることは、いうまでもないが、私立女子大学も、殆んどその凡てのものが華麗にして、行届いた設備を有する寄宿舎を有し、殆んど凡ての学生が、ここで共同生活を営んでゐるのである。私は、スタンフォード、ハーヴァード大学を始め、ミルス、スクリップス、ロックフォード、プリン・モア、ウエルズレイ、スマイス、マウント・ホリオーク、パッサー大学等の厚意によつて、数日間宛これらの大学の寄宿舎で過す光榮を與えられ、学生の勉強や日常行動を日夜にわたつて詳に視察することが出来、またこれら以外の大学の寄宿舎をも視察したのである。いうまでもなく、それぞれの大学の寄宿舎の建物、設備及び裝飾等には多少の優劣が見られるとしても、女子大学に於ける寄宿舎は、概して美しく、コンモン・ルームの如きは、一流のホテルのロビイを思わせるものも少なくない。食堂、台所、娯樂室等に於けるあらゆる近代的設備はいうまでもなく、その食事もまた概して良好である。寄宿舎にはハウス・マスターやヘッド・レヂデンス及びその他の教職員が同居してゐるが、しかも学生々活は殆んど学生の自治にゆだねられ、オーナー・システムによつて、規律されてゐるところが多い。従つて学生は極めて自由であり、何等の拘束も感じてゐないようにさえ見える。また寄宿舎に於て、常に講演会、演劇、音楽会、ティー・パーティーやダンス・パーティー等を始めとし、あらゆるスポーツの競技会等が繰返し催されるからその生活はかなり忙しいのである。大学に於ける寄宿舎生活は、大学生活のうち最も楽しいものの一つであるが、ここに於てそれぞれの大学は、その傳統的精神を維持すると同時に、無意識のうちには人格教育を與へてゐるよう思われる。いわばここで道徳的・社会的訓練が積まれ、知らず知らずのうちに、それぞれの大学の傳統が培われ、各自の人格が形成されて行くのである。私はアメリカの大学に於ける教育の大半は寄宿舎に於て行われているのではないかとさえ感じ

たのである。アメリカの大学に於ては、寄宿舎は、最も重大な、不可欠の教育機関である。アメリカの大学教育が個人とその成長を中心とするものであることは、先に述べたところであるが、かかる教育は利己主義に墮する危険を多分にもつているが、この危険を緩和しない除去して社会性を附與し、親和しと協力の必要を経験せしめるものもまた寄宿舎生活である。

特に女子は、ともすれば、自己中心的生活に陥り易いのであるが、この寄宿舎生活に於て、自己の生活にとつても、また將來直面するであろうその子女の教育のためにも、極めて必要な多くの知識と經驗を與えられるのである。この意味に於て女子大学に於ける寄宿舎は、女子教育にとつて、一層重要な教育機関であるといつてよい。アメリカに於ける大学教育の効果を、個人的及び社会的意味に於て、著しく高めているものは、まさに寄宿舎であると思う。

わが國に於ては、不幸にして、女子大学に於てさえも、学生数が非常に多くなつてゐるがため、常に教室その他の設備に不足を感じてゐること、大学が寄宿舎を建てて、その学生を收容するほど財政的余裕を持つてゐないこと、及び学生自身が寄宿舎生活を享樂すべく余りにも貧困であること等のため、すぐれた寄宿舎を有する大学は極めて少い。しかし將來に於て、若し理想的な民主主義教育を実施しようとするならば、出来るだけ多くの寄宿舎をつくり、ここで團体的教育を施すことは、絶對的に必要である。教室だけが大学生活である大学に於て、人格教育を施すことが如何に困難であるかは、われわれの經驗の示すところである。

(5) 女子大学の長所と短所

女子大学は、男子大学への入学を拒否された女子の向学心を満足せしめるために創立されたと、一般的に考えられてゐるが、共学制度が広く採用されるようになった現代に於ては、少くとも、女子大学の当初の存在理由は、極めて影の薄いものとなつてゐる。

そこで私は、少数の女子大学の学長に、將來に於ける女子大学の運命について質問して見たが、あるものは悲觀的であり、他の者は樂觀的であつた。何故に悲觀的にならざるを得ないかについては、既に述べた様に、一般に、共学制度の普及に伴う経営上の諸問題があげられてゐる。現在のアメリカにある二六六の女子大学のう

ち、キャソリック系の女子大学は、特定の目的をもつ一般教養の大学として経営されているから、おそらく、將來に於ても、共学の問題と無關係に、女子大学として存続する可能性を有していると考えられる。その他の女子大学のうち、大多数のものは、形式的には、とにかくとして、内容的には共学制度の実質に接近する傾向をとりつつあるから、女子大学の將來は必ずしも樂觀的ではあり得ないようである。他方、從來の女子大学の立場を堅持し、その存在理由を指摘するものもあるが、その論拠はどのようなものであろうか。この点について簡単に触れて見たい。

一、現在に於ても、主として大西洋沿岸諸州にはかなり多くの男子大学、即ち二二七の大学が存在しており、その教育的傳統と社会的評價を誇つてゐる。このような状態がつづく限りに於て、女子大学もまた同様にその教育的傳統や社会的評價を維持することが出来る、というのである。それのみならず、大学の背後にある社会的勢力としての卒業生の支持は非常に強く、従つて根本的な改革は容易に行われまいということである。

二、共学大学に於ては、その他のあらゆる社会に於けると同様に、依然として男性が常に優位的地位を占め、何事につけ支配的勢力を振つてゐるのは男子である。たとえば、学生自治会や課外活動に於けるその重要な役割の多くのものは男子によつて占められ、女子は、概して附随的な役割を與えられるに過ぎない。たとえば、会長は男子、副会長は女子というとり合せは多くの場合、一般的である。然るに女子大学の自治会や課外活動に於ては、当然のことながら、あらゆる役割は、女子によつて占有され、活動の計画から遂行に至るまでの一切の仕事が、女子自らの創意や工夫、或は計画の下に遂行される。ここでは男子学生の発言に遠慮したり、その顔色をうかがう必要は毛頭もないのである。従つてこの意味に於て女子大学は女子に対する民主主義的訓練のよき道場として、または活動の場所として無上の價值を有するものである。

三、共学大学の場合、男女は校庭や教室に於て日日接触・交渉する機会に恵まれてゐるがため、自ら常に相互に心を引かれ、従つてともに過す時間が多くなり、一般的に、自己の勉学に集中する時間は減少せざるを得ない。いわば共学の場合には勉学にうち込む度合が低くなる傾向がある。然るに女子大学では少くとも、教室や校庭に於て、定められた特定の時間の外は、自己に接近する男子によつて、直接わづらわされることが少いか

ら、勉学に専念することが可能である。勿論、土曜日及び日曜日のデートについては、常にその考慮を怠らないかも知れないが、それにしても共学の場合よりは遙かに勉学の時間が多いというのである。

四、アメリカの大西洋沿岸諸州に於ては、男女の大学を別々にすることは、従来常識であつたが、アパラチアン山脈以西の中西部諸州に於ては、共学大学が圧倒的である。後者の諸州に於ける男子大学は僅かに五大学を数えるに過ぎず、女子大学はキャンソリック女子大学以外には、ミルスとスクリップスがあるに過ぎない状態である。ところで女子は共学大学に於て何ごとにつけ男子と平等の機会を與えられることになつてゐるが、女子学生の特異性に対しては殆んど何等の考慮も拂われていないように見える。多くの共学大学に於ては、遺憾ながら、依然として男子大学としての傳統が堅持されており、その学科内容はその大部分が男子を対象としたものである。いわば男子による男子のための大学であつて、女子のために特に設けられた学科は稀である。多くの教授は男子であり、学科課程もまた男子を対象として編成されている。婦人教授の数は男子教授のわずか五％に過ぎず、しかもその声價は、一般的に男子よりも低いという有様である。従つてホワイト Jr は「今日行われてゐる共学なるものは、婦人が関する限り、偽物であるのみならず、また男性支配を保持する主要手段の一つなのである」と批判しているが、必ずしも的はづれではないであらう。

もしこれが共学大学の現実の姿であるとするならば、女子の生物学的特異性、その発達傾向及びその特殊能力等を認識し、これに適應する高等教育を行うところの女子大学の存在理由がここにあるのである。またこれは女子高等教育のため、絶對的に必要であるといわねばならない。

五、女子は、大学を卒業するに當つて少くとも二つの重要な問題に直面する。家庭生活か、就職か、という問題である。若し結婚を選び、家庭生活に入ることを選択するならば、直ちに第二の問題に直面する。それは家族的義務が減少する四十五才以後の時期に於て、婦人はどのようにして満足すべき活動分野を見出すかということである、とホワイト Jr はいうのである。多くの女子はその知識や能力を正當に認められることが少く、従つて活動の自由が許されないことに多くの不満をいだいてゐるから、現在の女子大学の問題は、男子が男子のために構想した男子中心の学科課程に対し、「女子にとつて特に興味ある」少数の科目を附加するというよう

な点にあるのではない。これよりも遙かに重大な問題が横たわつてゐる。それは教育に關する機会均等の原則が男女に對して存する限り、彼等に平等の教育が與えられるべきであるが、それは機械的なものであつてはならないということである。しかし現在のよゝな共学大学のままであるならば、女子に適當した教育は望むべくもないのであるから、少くとも、次のよゝな三つの目標をかかげ、これに向つて進まねばならないと、ホワイ ト Jr は主張するのである。

1 女子は、男子の場合には、決して起り得ないところの、二十代及び四十代に於ける危機に遭遇するから、これを意識的に切りぬける準備をしておかねばならない。女子は大学の卒業を前にして、若し結婚しないとすれば、どのよゝうにして、家庭の運営に當るかについて、知るところがなければならぬ。更に、若し結婚するとするならば、その子供が成長した後、晩年を有益に過し、効果的に送ることの出来る趣味や技巧を学び、これを發展する工夫を持つていなければならぬ。

2 女子は、大学教育によつて、現代社会に於けるその地位を、明瞭に、感情をまじえずして、理解する必要がある。とりわけ、彼女自身を不利な地位に迫込み、更にその娘を不利な地位に置こうとする様々の脅威を、どうしたならば除去し得るかの方法を、自ら発見しなければならぬ。何となれば、教育は、單に社会生活過程に對して、適當に順應することのみを教えるものであつてはならないのであり、われわれの生活様式を、われわれが生活すべき理想的な生活様式に對して適當に順應する方法をも教えるものでなければならぬからである。

3 これらの目標よりも、一層重要なものは、女子は男子と同様に尊敬に値する人間であること、また女子がその最善をつくしてしようとしてゐることは、男子がその最善をつくしてしようとしてゐることと、同様に重要であるのみならず、また尊敬に値するものであることが承認される雰囲気に於て勉強するということである。女子は、一方に於て、何が女らしさであるか、また他方に於て、何が重要でないか、について男子の見方によつて圧迫を加えられることなく、自らの意志と判断に従うところの自由を持たねばならない。このよゝな心理的環境があるところに於てのみ、女子は、大いなる斗争をいとまますして、自らが婦人であることの眞のよゝろこ

びに到達することが出来る、というのである。

これらの三つの目標は、現実の生活に於ては、相互に入りこんでいて明瞭ではないが、従来女子がこれらの目標に向つて、もさくをつづけて来たことは事実である。このような男子の目標と異なる目標を持つ女子の関心や要求に答える教育はどのようにして実施されるであろうか。それは男子支配の下にある共学大学に於けるよりも、むしろ女子大学に於てである。とりわけ、家族制度を中心とする諸々の研究、家族の安全や幸福に貢献するところの食物、衣服、住居、衛生、健康、美学等に関する研究やこれに関する教育によつて得られる家庭の幸福と安全は、女子大学の教育と貢献に俟つところが極めて大きいのである。更に、たとえ家庭をもたず、職業につくような場合に於てさえも、婦人の職業の多くのものが、これらの研究の延長と見做されるものと密接な関係にあることを知るべきである。

以上、リン・ホワイトJrの所説は、女子大学教育の理想をかかげたものとしては、一應承認されるが、問題は依然として、その実現の方法と実現に必要な社会的・経済的諸条件にかかつている。これらの問題に関する研究は今後に残された重要な問題であると思う。

これを要するに、共学大学にも女子大学にもそれぞれ長所と短所とがあるが、しかし女子が生理学的・心理学的に男子と異なる諸点を有する限り、女子の生活や職業のためのみならずその人間性の完成のためにも、女子大学が存在することは、極めて当然のことであり、また有意義であると考ええる。

Women's College Education in the U. S. A.

Namba, Monkichi

Résumé

I travelled in the U. S. A., European countries, India, Pakistan and Hong Kong for four months from October, 1955 to February, 1956, having received a travelling fellowship from the Rockefeller Foundation in New York. I visited fifty colleges, universities and other schools in these countries where I observed mostly the administration, education, curriculum, facilities, equipment, dormitories, etc. This article is a sort of report of my observations and studies of women's colleges in the U. S. A.

This consists of (1) higher education for women, (2) development of education in women's colleges, (3) present situation of women's colleges, (4) my impressions of women's colleges and (5) advantages and disadvantages of women's college. These observations and studies led me to the conclusion that women's colleges have significance and importance in the cultural and professional life of women, because of women's physical differences and social status in the present society in spite of the fact that there is a greater tendency toward the coeducational system in the U. S. A.